

認知言語学と現象学的言語論の可能性 —イメージ・スキーマ理論と志向性分析の統合の試み—

宮原勇

はじめに

本論文の目的は、1980年代からアメリカ言語学界で台頭してきた、ラネカー(Ronald W. Langacker, 1942-)らの「認知言語学」の試みを哲学の立場から検討し、同時にフッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)の現象学的言語論に萌芽的に含まれている「認知言語学的発想」を取り上げ、新たな哲学的言語理論の可能性を探ることにある。

われわれは、外界の現象や心の内的現象に関して、それらを認識するときに使用する「概念」(concept)、ないしは「カテゴリー」(category)からなる体系を持っている。体系と言ったのは、それを構成している個々の概念、ないしはカテゴリーが相互に有機的に結合しあっているからである。「概念」や「カテゴリー」というのは、言い方を換えれば、「一般的表象」(general representations)である。そのような一般的表象の体系は、具体的には個々の言語体系の中に具現化されていると言ってよいだろう。したがって、一つの言語体系を身につけるということは、そのような概念システムを習得することであるとも言える。認識とは、そのようなカテゴリーによって目の前の事象を意味づけることと言ってもよい。それは「認知的カテゴリー化」(cognitive categorization)と呼べるプロセスである。そして、その為のデバイスとして予めわれわれに備わっているのが、上記の「概念システム」なのである。もちろん、その体系は唯一絶対的なものではなく、絶えず変化し形を変えるという柔軟性を有する、ひとつの仕組みである。

さて、ここではそのような「概念的システム」をあえて「オントロジー」(Ontology)と呼ぶことにする。そのようなオントロジーは、個々の認識主体の認識作用に於いて概念的枠組み(conceptual scheme)として機能しているが、認知言語学は、そのような概念体系がどのようにして生成してきたかについて「言語的カテゴリー化」(linguistic categorization)の理論という形で研究を展開してきている。それは単に、一般的表象としての「抽象的概念」の生成の理論ではない。例えば、イギリス経験論で問題となっ

た「抽象化」(abstraction)といった作用の理論ではない。

認知言語学では、われわれの主観の中には、一般的知識が「プロトタイプ」、つまり具体的な典型例に関する表象という形で蓄積されているとされる。つまり、哲学でいう「普遍(者)」(Universals)は、特定の概念に対応する集合内の典型例、しかもそのタイプとしての類的表象によって記憶されているという。例えば、BIRD という普遍者の表象とは、BIRD で指し示される集合全体の中でも、各個人が最も BIRD らしいと捉えている典型例、つまりプロトタイプについての表象として記憶されているという理論である。prototype というのは、もともとコピーに対してのオリジナル、つまり原型という意味があり、そのオリジナルはそれ自体、「個別的表象」(particular representation)なのか、それとも類的表象なのかは、解釈が分かれるようである。だが、いずれにしても典型例の表象として「普遍」が蓄積されていると考える。そもそも「プロトタイプ」とは何かについては稿を改めて論じなければならない。

自然類(natural kinds)のような場合はプロトタイプ説での説明が有効だが、認知言語学では一段抽象性が高い「スキーマ」という概念を併用する。スキーマという概念によって、自然種のような具体的事物の類種概念ばかりではなく、関係や属性、あるいはより抽象度の高い普遍に関して、説明可能となる。普遍的概念がどのように生成してきたか、あるいはどのように記憶されているかに関しては、カテゴリー化の理論という観点から論じられているのに対して、具体的に実在的事物を認識してそれをどうやって言語化するかという問題は、「言語的概念化」の問題として論じられている。

哲学の側では、普遍概念の生成や使用の問題は現象学の立場から、特に「発生的」現象学という立場から分析可能である。

また、認知言語学は言語表現の「意味」を、発話主体による「概念化」(conceptualization)と捉える。つまり、発話主体が自分の目の前に展開する現象を、上述の「概念システム」によって「解釈」(construe)するプロセス自体が、そこから生み出された言語表現の意味であるという。もちろん、言語表現として結晶している構造そのものにその概念化は対応しているとは言え、あくまでも表層の言語形式自体は、概念化のプロセスそのものとは違う。

このような立場は、概念化という mental な産出プロセスの産出物(product)として言語表現をとらえるというもので、現象学のスタンスに近い。つまり、現象学の志向性理論では、「現象」という認識形成体は、認識主体の「志向性」という構成的意識作用

の働きに帰着させるのである。つまり、志向性という mental な産出プロセスの産出物 (product) が、「現象」なのである。しかも、フッサールでは、志向性という構成的認識作用の中核は「意味付与」作用として考えられている。構成的認識作用によって付与される〈意味〉とは、カント哲学の認識論の用語で言えば、「概念」に当たる。つまり、感覚を通じて与えられる要素を志向性の中核をなす意味付与作用によって、ある意味では「解釈する」のであり、その際に「意味」は物事の解釈の枠組み、つまり「概念的枠組み」(conceptual scheme)として機能している。

したがって、認知言語学で考えられている構図、つまり〈概念化—言語表現/その表層構造〉と、現象学で考えられている構図、つまり〈志向性—現象/認識形成体〉とは、並行関係をなしており、認知言語学で語られている「概念化」のプロセス自体は、認識主体の志向性の働きであるということができよう。ただ、認識主体が既に一般的知識としてそのつど身につけている「概念システム」の具体的構造の詳細は、われわれの認識の所産たる言語表現として具体化されなければ、そのものとしては扱うことはできない。現象学的志向性理論にとって、われわれの日常に於いて展開される認識作用が具体的にどのような概念図式を使用して行われているか、言語的分析を通じて詳細が解明されない限り、緻密な分析ができないのである。

以上のような視点から認知言語学と現象学的言語論の統合の試みを行うのであるが、本論文ではまずは認知言語学でのイメージ・スキーマを手がかりとした「概念化」の分析を提示した後、現象学の立場から「志向性」理論によってその分析を再度検討することにしたい。

上記で述べたことは、次のように図示することができよう。

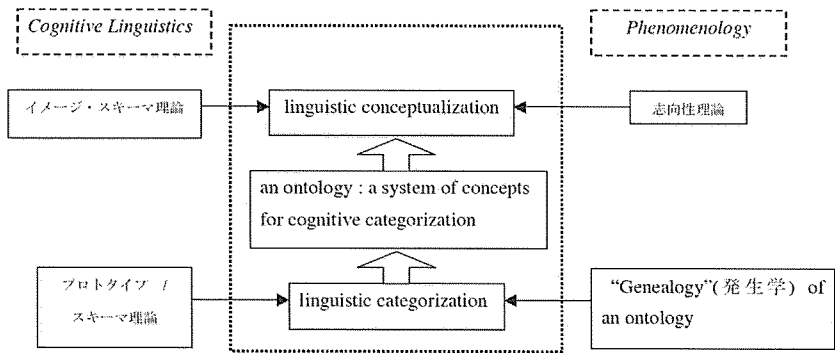


図1 認知言語学と現象学の相補性

1. 「概念化」(conceptualization)ということ

ラネカーは、言語表現の meaning とは、a cognitive phenomenon としての conceptualization であるという(Langacker, 1987, p.5)。

meaning = conceptualization (as a cognitive process of conceiving)

単に concept そのものが、meaning なのではなく、あくまでも conceptualization というプロセスが meaning なのである。つまり、まず cognitive なプロセスがあって、そこで meaning が生成するというのだろう。もちろんそれは言語表現を理解する認知プロセスではなく、対象世界の事物や出来事を認識するプロセスであり、それは同時に具体的な個々の概念が成立するプロセスでもある。conceptualization というとき、対象や事象の捉え方そのものを意味するのだが、それは個々の具体的な「概念内容」を指すのか、それともそのつどわれわれの意識の中で生じている意識的出来事そのもの、つまりそのプロセスそのものを指すのか、問題となる。つまり、the process of conceiving そのものを指す時、プロセスそれ自体はあくまでも particular であり、individual なものである。それに対して、the content of the conceived というとき、type 一般が有するような、一種の generality を有していると考えられる。conceptualization というとき、場

合によっては、それらを同時に指し示すような多義的な使用の場合もあろう。とはいえ、ラネカーでは、言語表現の成立以前にそれに対応した直接的認識プロセスがあり、そのような直接的な認知プロセスによって生じた経験内容が、その認知内容に応じて言語表現されると考えられている。2008年刊行の著書では、この点が意識的に強調されている。

第一に、意味は概念とは同一ではなく、概念化と同一なのである。この概念化という用語は、そのダイナミックな本性に光を当てるために正確に選ばれた用語である。概念化とは、心的な経験のどんな一面でも含むように広く定義されている。それは、次の四つの内容を包摂するものとして理解される。まず、(1)新奇な概念と既成の概念の両方、(2)単に「知的な」概念ばかりではなく、感覚的概念や運動概念、感情的経験も含む、(3)物理的、言語的、社会的、文化的コンテキストの把握も含む。そして、(4)(瞬間的に出現するというよりも)一定の処理時間をかけて進行し、展開される概念化といった、四つの要素を含んでいるものとして理解される。したがって、たとえ「概念」というものが、静態的なものとして受け取られているとしても、概念化はそういったものではない。(『認知文法-基礎的入門』2008年、30頁)

In the first place, meaning is not identified with concepts but with conceptualization, the term being chosen precisely to highlight its dynamic nature. Conceptualization is broadly defined to encompass any facet of mental experience. It is understood as subsuming (1) both novel and established conceptions: (2) not just “intellectual” notions, but sensory, motor, and emotive experience as well; (3) apprehension of the physical, linguistic, social, and cultural context; and (4) conceptions that develop and unfold through processing time (rather than being simultaneously manifested). So even if “concepts” are taken as being static, conceptualization is not. (*Cognitive Grammar, A Basic Introduction*, 2008, p.30) [下線筆者]

ただし、直接的な認知内容はあくまでも、特定の言語表現をとって初めて確認できるものであり、それぞれの言語表現にはどのような認知内容が込められているか、つまりその表現はどのような conceptualization から生じたのかが問題なのである。

「概念化」という表現は、実在世界に関する認識そのものを指し示しているとも考えられる。つまり、認識者、ラネカーの用語では「概念化者」、あるいは「概念主体」(conceptualizer)が知覚を通じて現実を認識すること自体を「概念化」と捉えたと考えるのである。そして、場合によっては、そのような「概念化」という認識プロセスを通じて成立してきた、個々の具体的な言語表現の表層構造に込められた「概念構造」自体を指し示していると解釈することも可能である。

言語表現の理解と非言語的な対象認識とを統一的な視野で解明しようとしたのは、近代においては現象学の創始者フッサールのみである。既に指摘したように、われわれは認知言語学者ラネカーの理論にフッサールの洞察ときわめて著しい類似性をみる。そもそも、後期ヴィトゲンシュタインの「私的言語批判」の言説に乗り、言語研究において認識論的、言い換えれば認知論的要素をすべて排除してしまうという傾向が戦後の分析哲学には顕著であった。この傾向は、心理学上の行動主義の支えもあって、拡大した。場合によっては、「語用論的転回」(the Pragmatic Turn)においても、そのプラグマティズムと繋がりがからか、認知的側面の捨象が行われてしまう傾向があった。

それに対して、あくまでも主観的意識の志向性という視点から言語表現の理解と非言語的な対象認識との間を結びつけながら解明してきたのが、現象学での言語論である。それが、今や、全く伝統が違ったラネカーの認知言語学と著しい類似性がみられるようになった。

2. ラネカーの認知言語学に対する志向性理論による補完的研究

ラネカーの認知文法論の中で、「参照点」(reference point)構造、「ランドマークトラジェクター」(landmark-trajector)構造、時間的過程(temporal process)構造といった三つの重要な分析装置を取り上げ、それぞれに現象学的志向性理論による補完的解釈を加えていきたい。

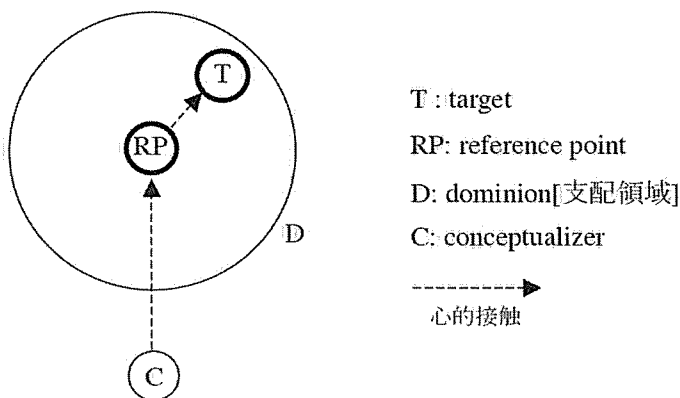
2-1 参照点(reference point)構造に関する志向性理論的解釈

参照点構造とは、もともとそれ自体では目立たない対象や、それ自体では直接的にアクセスするには唐突すぎるような場合に、既に際だっている対象にアクセスしてそ

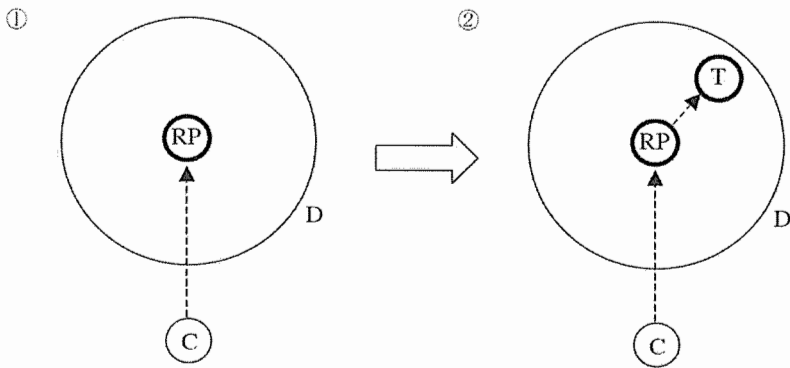
れを手掛かりとして前者の対象にアクセスすることがあるが、そのような認知構造を参照点構造と呼ぶ。もともと指示しようとしていた対象をターゲット(target)と呼び、既に際だっていた既知の対象を参照点(reference-point)と呼ぶ。そのような認知構造が、所有表現やメトニミーといった表現などにみられる。

例えば、話者の目の前に自転車がおり、その自転車のペダルに言及しようとする場合、「その自転車のペダル」といった表現をするように、いったんアクセスしやすい全体的対象に言及し、その一部である「ペダル」に向かうという構造をいう。

ここでの記述は、認識者でもある話者が自ら認識したまを表現するという単純な状況を想定している。実際の発話ではそう単純ではないが、方法上、単純化した状況の中で分析していく。



まず言及しようとするターゲットを指示しようとするのだが、それが目立たなかった場合などのように直接言及するよりは、他の目立つ対象や現象への注意を経由して、たどり着く方がわかりやすい場合がある。あるいは、間接的にしか指示そのものが成り立たない場合がある。そのような時、次の図の①のようにまずは目立つ対象、ないしは既知の対象に一旦注意を向け、②に見られるように、その後「参照点」と近接的関係にあるターゲットに注意を向けるようにしむける構造である。



【志向性分析】

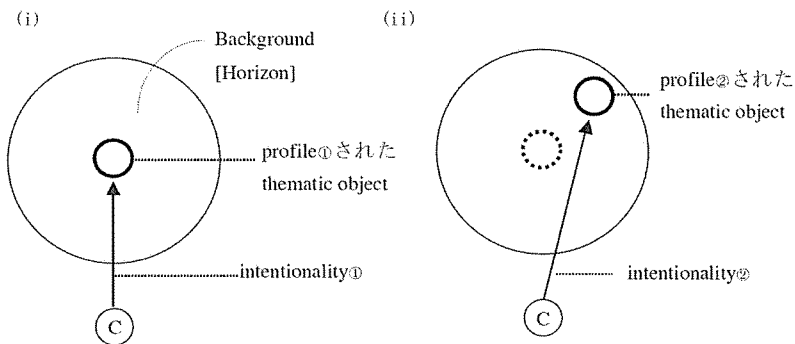
現象学的な視点から認知言語学でいう参照点構造に関与している認識プロセスを記述し直すと以下ようになる。

フッサール後期の発生的現象学では、われわれの認識は、まずは認識主観の能動的な認識活動が関与する以前の「受動的」段階から始まるとされる。まず、われわれの視覚野では、何らかの概念的「意味理解」が始まる以前に感覚的な際だちや分節化が生じているというのである。つまり、意識的に何かを認識しようという意志的な「探究」の眼差しが生ずる以前に、漠然とした段階で、感覚的ゲシュタルトが生ずる。これは、感覚自体が自己組織的に構造化されることを意味している。そこには、背景である「地平」と、注目を浴びて、profileされた「主題的」対象が現象している。なにがprofileされるかということ、純粋に感覚的な際だちがプロフィールされる場合もあるだろうし、何らかの関心(interest)に導かれて、感覚的には際だちではないが、認識者にとって特に関心が生ずるものもあろう。いずれにしても、下記の図のように the phenomenal field の中に attention が当てられ、profileされる対象が生じ、thematic になるという構造が見られる。

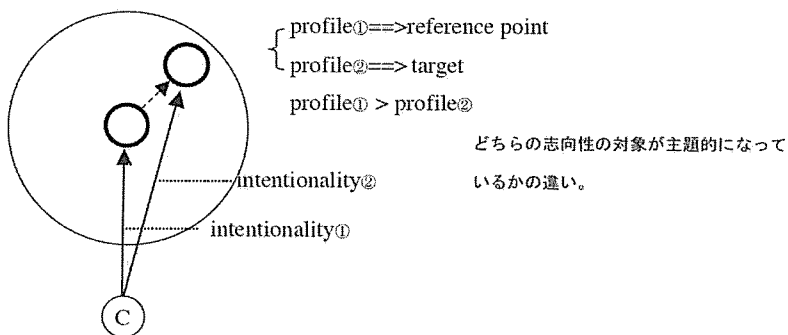
その構造は、基本的には「概念化者」という認識主観の志向性(intentionality)の働きで生ずるといってよい。参照点構造とは、下記の(i)の志向性が、(ii)の志向性を「動機づけている」のである。「動機付け」(motivation)とは、mental phenomena の領域で見られる「連合」(association)の働きによる緩い形での「因果的な影響連関」のことをいう。

(i)の profile①と(ii)profile②とを比較した場合、前者の方の際立ちの程度が高い、つまり salient なので、まず注意は前者の方に向かったのである。フッサールの分析では、背景に留まっていた対象も注意が向けられ、周りの事物から際立って来ると、それが志向的探索の対象となる。つまり、thematic な対象となるのである。ただし、そのような thematic な対象の周辺には必ず latent なままの対象領域が背景としてひろがっている。そのようにして、まずは profile①に焦点が当てられた後、本来それを指示すべきであった対象 profile②へと焦点が移るのである。ただ、その対象 profile②への志向性は対象 profile①への志向性によって、動機付けられているのである。つまり、profile ①から profile②への移行は、認識内容としてある種の「連想」を引き起こす力を持つものとして考えられていたのか、あるいは、全くの習慣的結びつきによって、可能となっているのである。両方の場合とも、「動機付け」(motivation)という現象によって、説明がつくようになった。

つまり、profile①を対象とする志向性①と、profile②を対象とする志向性②との「動機付け連関」が成立するだろうという認識のもとに、本来言及しようとした対象 profile ②を対象 profile①への志向性を経由して指示するという現象なのである。そのような動機付けによる志向性の連関においては、profile によって thematic になる対象が移行する。最初に thematic になっていた対象が、reference point となって、もともとと言及しようとしていた target への指示が行われるのである。[(iii)参照]

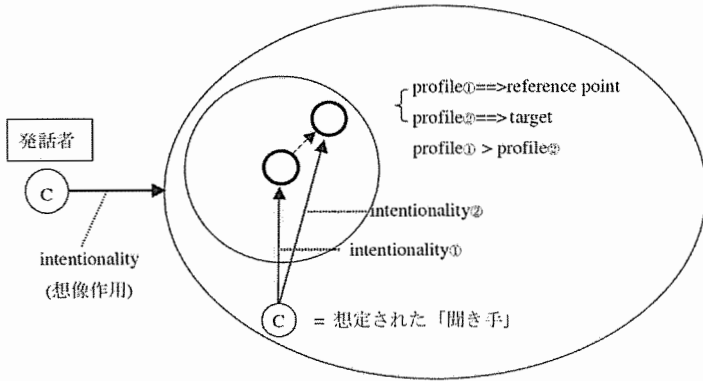


(iii)



【コミュニケーション戦略を配慮した分析】

上記の記述は発話者でもある認識者がどのように認識したのかという視点から行われている。しかし、実際は、認識、つまり「概念化」のプロセスと発話者の発話戦略上描く mental space とは区別する必要がある。後者の場合、発話者は、聞き手の認識状況を推測しながら、target となる対象にいかにして注意を向けるかに心を砕く。話し手によって想定された「聞き手」にとっては profile①の度合いが高いことを、話し手は予想している。それゆえに、その対象を reference point として採用するのである。その場合、当然のことながら言語表現は発話者の認識がそのまま反映したものとなるのではなく、発話者は聞き手がどのような認知状況にあるかを「想像」という志向的認知作用により推測し、どのような表現をしたら聞き手にとって理解しやすいかを考えて発話する。そのような発話戦略を考慮してイメージ・スキーマを描くと、次の図のようになる。そして、実際の言語表現はそのような話し手のコミュニケーション戦略を反映したものとなっている。



以上が、参照点構造の志向性分析であったが、つぎに landmark-trajector 構造の分析を行おうと思う。

2-2 landmark-trajector 構造に関する志向性理論的解釈



(1) The knob is *above* the keyhole.

(2) The keyhole is *below* the knob.

tr: knob lm: keyhole

tr: keyhole lm: knob

複数の対象が現出している状況の中で、それらの対象が織りなす一つの「事態」を表現するときに見られる構造が landmark-trajector 構造である。例えば二つの対象の上下関係を表現するとき、その内の一方を目印として landmark にし、他方を trajector にして表現するということがある。

図の例では、

(1) The knob is *above* the keyhole.

(2) The keyhole is *below* the knob.

という言語表現に対応する現象である。knob と keyhole との空間的位置関係は、(1)と(2)の表現では変わらない。どちらを既知の対象として基準に使うかが違うのである。そのような空間的位置関係を表現するときに基準とする対象を landmark という。そして、それを目印として指示される対象を trajector と呼ぶのである。ただし、認識者はもともと複数の対象からなる一つの「事態」を認識しており、その際、それらの対象の内、目立ちやすい対象や既に情報として既知であった対象が landmark になり、空間的位置関係の基準となるのである。前置詞 *above* と *below* によってそれぞれ表現される場合、素朴に考えると「同じ事態」でも二つの違った文で表現されると主張されるかもしれない。しかし、ラネカーの場合は、一つの表層の言語表現には、それに対応する一つの認識作用、つまり「概念化」が対応するのであり、認識論的に言えば、述語文の指示対象たる「事態」と「概念化」とは相即関係にある。つまり、

言語表現としての述語文 ⇔ 概念化 ⇔ 指示対象としての事態

というように一対一になっている。したがって、(1)と(2)は「同じ事態」を表現していると、簡単には言うことはできない。もし、「同じ事態」というなら、それは keyhole と knob とが、keyhole が下にあるような空間的垂直関係にあることを表現する文章になろう。言語表現が違えば、その言語表現が生まれる源泉としてそれぞれ違った認識プロセスがあるはずであり、そのようにして認識された事実は違いがあるはずなのである。

現象学者フッサールは、そのような場合、「事態」(Sachverhalt)と「事況」(Sachlage)とを区別する。つまり、(1)と(2)とは、それぞれ別の「事態」を表現しているが、同じ「事況」を指し示していることになる。

例えば、

(3) A is larger than B.

(4) B is smaller than A.

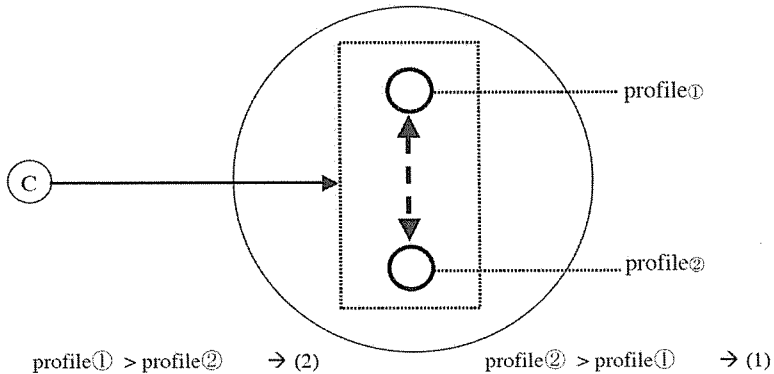
(5) The sentences (3) and (4) express the same relation between A and B.

(3)と(4)では、表現している意味内容が違うので、その意味内容そのものを表現するときには「事態」という用語を使い、それらの文はそれぞれ違う「事態」を表現しているという。しかし、(5)の文のような表現も可能であり、その限りでは A と B との「同一の」大小関係を指し示しているともいえる。そのように同一の大小関係を「事況」と呼ぶのである。

ラネカーの場合でも、そのような二重構造を想定してもよいのであろうが、言語表現と、それが生み出されるプロセスである「概念化」とはあくまでも相即関係にあるものとして考えられており、その関係を越えてさらに客観的な実在を想定する必要はないのであろう。

この landmark-trajector 構造と、先に述べた reference-point 構造とは、一見類似の現象のように思われるが、landmark-trajector 構造とは、全体として一つの現象であって、profile された複数の対象からなる一つの事態の中の構造であると考えられる。それに対して、reference-point 構造とは、複数の対象に絡む指示の動機付け連関と言ってよい。一つの現象領野が、landmark と trajector という一対の構成要素により構造化されているのである。

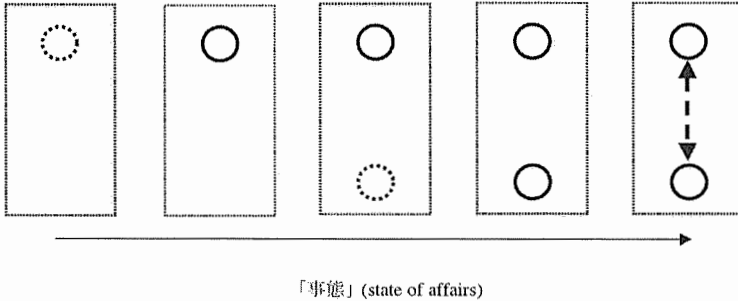
以上まとめて図示すると次のようになる。



[profile の「強弱」を大小関係で表現している。]

なお、上記図中の(1)(2)は、前ページ中の英文の番号を指す。

【志向性分析】



現象学の立場から上記の構造の発生を段階的に記述すると下記ようになる。

(1) 〈現象野〉(the phenomenal field)内の感覚的レベルでの構造化・「際だち」の成立

〈ある一つのまとまりを持つものとして個体的対象が成立し、それが認識者の関心の下、他の個体的対象よりも「際だつ」という現象が生ずる〉段階

まず、眼前の現象野の或る対象領域内で、それが色や形などの違いによって周囲の情景から profile される対象が現れる。固体的(solid)な対象は、それだけで周りの事物からの独立性を勝ち得る傾向にあるが、それとは対照的に、それが細かい粒子の状態にあれば、一つの独立な対象とは認知されなくなる。液体となるとさらに困難さが増す。一つのまとまりを持った「個体」(individuum)というものは、単純に「固体」であると言ってもよいくらいである。しかし、今述べたようにその大きさが段々と小さくなり粒子となると、mass として扱われるようになる。ただし、顕微鏡で眺めると、微細な粒子一つ一つが独立した実体として認識されるのであるから、結局は何を一つの独立した個体的実体と見るかは、ひとえに認識主体、つまり概念化者にかかっている。

(2) 「内部地平」(inner horizon)や「外部地平」(outer horizon)の「解明」(explication)の働き

(1)のプロセスを通じて成立してきた対象に関して、そのものの属性や内的な規定に注目したり、他の対象との関係に注目したりして、より詳細に観察し、解明しようという関心が働く。フッサールでは、そのものがそれ自体として、つまり他との関係に

関わらず有している様々な規定の総体を「内部地平」と言い、他との関係やそのものがおかれている外的状況などの総体を「外部地平」というが、認識者は認識作用のターゲットになっている対象に関して、その内部地平や外部地平を「解明」しようという関心が働くのである。

(3) 「解明」における〈「解明項(explicans)」と「被解明項」(explicandum)〉の分離と〈「基体」(substrate)と「規定」(determination)〉の対応

{ 被解明項——基体、つまり「主語」となるもの
解明項——規定、つまり属性等を表現する「述語」部分

(2)の解明プロセスにおいては、解明の対象となっている現象は「被解明項」として捉え直され、その現象の属性、ないしは内的地平は、その対象を規定するものとして「解明項」として認識される。

一つの「被解明項」に関して解明のプロセスを通じてさまざまな内的、あるいは外的規定が付与されるが、それらの規定は、同一の対象の属性として認識される。つまり、その同一の対象はそれぞれの内的規定、外的規定を担う「基体」(substrate)として「保持」される。

(4) 「として」(as, als)を介した「解明項」と「被解明項」の総合

〈S[被解明項] as P[解明項] ー先述語的综合の段階〉

解明においては、「基体」としての「被解明項」は「解明項」〈として〉(as)把握される。この〈として〉構造(as-structure)はあくまでも、認識プロセスの構造なのであって、言語化されているわけではない。これは、「受動的」な認識段階において生ずる現象である。

(5) 能動的述語判断作用(predication)の遂行

前項(4)のプロセスにおいては〈として〉を介した把握が行われたが、今度はそのような、直接的「媒介性」の段階ではなく、〈である〉を介する能動的な判断作用の遂行が行われる。つまり、「一は一である」という述語判断が行われて、はじめて「主語」と

「述語」が成立すると言える。

〈として〉を介しての「被解明項」と「解明項」との媒介は、〈である〉を介した媒介より、或る意味では直接性が強いといえる。逆に、「一である」という述定は、「被解明項」が「解明項」によって単に規定されたと言うよりも、一つの判断作用によって、両者の結合が「真」であるということがあえて主張されているのである。その意味で、媒介的結合が自覚され、能動的な作用が働いていると言ってよい。

(6) 述語命題のような言語表現の「名辞化」(nominalization)

「一ということ」の成立

例えば、目の前の花が赤いという現象を見て、「この花は赤い」という述語命題を発話したとしよう。この言表が成立するには、まず花が周りの背景から浮き出て、志向性のターゲットになり、それがどのような色なのかについての解明への関心が働く、あるいはその花の赤い色が注目されるという段階がある。もちろん、そのようにして周囲から区切られて浮き出た部分的現象が「花」という知識の中に概念的枠組みとして予め蓄積されていた意味が、その部分的現象に付与される。それと同時に、認識者の近傍のある現象ゆえに「この」という指示形容詞が、その対象の種類を表示する語の前に付与されるのである。

このようにして、「この花」として認識されたその花は、さらにどのような色なのかという認識関心の下に〈赤いもの〉として把握される。この〈として〉を媒介とした把握の次に、〈一は一である〉という述語構文を成立させる作用が働くことになる。こうして、「この花は赤い」という述語文が成立する。しかし、さらに「この花は赤い」ということ自体が志向性作用にとってのひとつの対象になりうる。つまり、志向性対象は、花や椅子のような単一的個体のみではない。例えば、交通事故のような一つの出来事も、志向性対象になりうる。一瞬で終わってしまう出来事の場合もあろう。また、「この花は赤い」のように比較的持続する状態の場合もあろう。そのような出来事などが、志向性にとっての単独の対象となりうるのである。それは、言語現象としては、述語命題の「名辞化」として現れる。つまり、「一ということ」節の成立である。

フッサールの用語では、そのような述語文の名辞化は、「事態」(Sachverhalt)と呼ばれる。これは、一つ以上の単独対象がどのような状態にあるのか、その場合、単にその内部的属性がどうであるのかということや、あるいは複数の対象がどのような関

わりの中に存在するのかといったことも想定されている。いずれにしても、このようにして「こと」性が成立する。

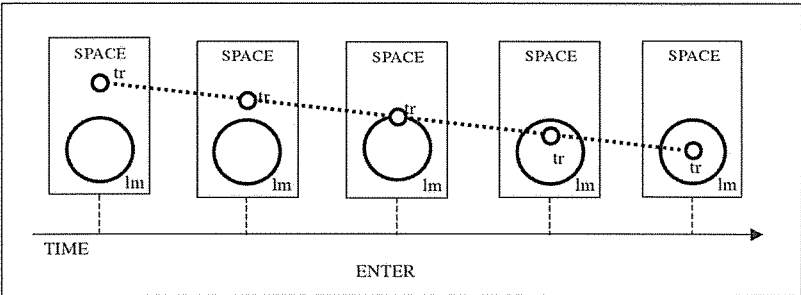
(7) 名辞化により取り出された命題の「全体的意味」の対象化(objectification)

上記の例では、一つの現象野において二つの際だった対象が出現し、どれか一方の対象が被説明項となり、そして説明項としての役割を担わされたもう一方の対象により規定され、一つの事態が成立し、その事態の統一的な「意味」が付与されるのである。

2-3 temporal process についての Langacker の理論と Husserl の時間意識の分析

今までは、単独の対象の成立と事態の成立とを見てみたが、今度は時間的経過に関わる言語表現を考察したい。時間的経過に関してラネカーは、下記のようなイメージ・スキーマを使い分析している。まずは、彼の分析を紹介し、その後で、それを志向性の立場から再解釈しよう。

まず、動詞の ENTER がどのような概念化を意味しているのかイメージ・スキーマで描いてみると、下記のようなになる。ENTER とは、どこか基準となる現象領域に「入る」現象である。この現象領域は「入る」という移動運動にとって見ると基準となるものである。それは既に触れたように landmark である。そして、それを基準として移動する対象は、target として表現される。それら二つの関係が時間の推移とともに変化するのである。そのようなプロセスを表現すれば下記の図のようになる。



このような ENTER という現象は、上図のように横軸に時間をとってみると、landmark と target との位置関係が次第に変化するプロセスとして描かれる。実際にそのような動きは動詞 ENTER によって表現されるのだが、それが一挙に名詞化されて名詞としての ENTER が成立する。そのような名詞表現には、その通時的プロセスが全て含まれる事態が表現されることとなる。つまり、SPACE 全部が重なり合い、一つの図に表されることになる。時間的プロセスをたどる通時的概念化を sequential scanning と呼び、それぞれの場面を一挙に共時化したものを summary scanning と呼ぶ。そのような過程をラネカーは、次の(1) から(4)の図で表現している。

$$(1) [T_0 > T_1 > T_2 > \dots > T_n]$$

まず、それぞれ特定の時点 T_i での出来事であり、それが移り変わる。

$$(2) \begin{bmatrix} S_0 \\ C \end{bmatrix}_{T_0} > \begin{bmatrix} S_1 \\ C \end{bmatrix}_{T_1} > \begin{bmatrix} S_2 \\ C \end{bmatrix}_{T_2} > \dots > \begin{bmatrix} S_n \\ C \end{bmatrix}_{T_n}$$

S_i : situation as momentarily conceived

C: conceptualizer

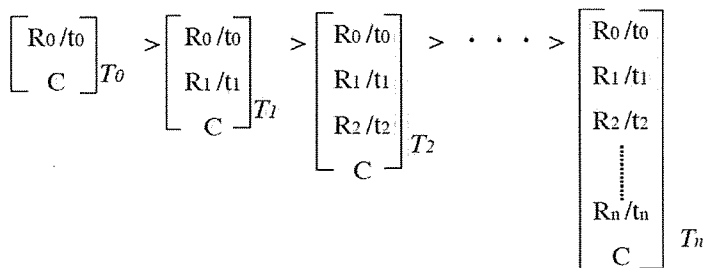
それぞれの時点で、概念化者がその都度の状況をどのように認識しているかが記述される。ここでは「状況」という形で一般的に記述されている。

$$(3) \begin{bmatrix} R_0/t_0 \\ C \end{bmatrix}_{T_0} > \begin{bmatrix} R_1/t_1 \\ C \end{bmatrix}_{T_1} > \begin{bmatrix} R_2/t_2 \\ C \end{bmatrix}_{T_2} > \dots > \begin{bmatrix} R_n/t_n \\ C \end{bmatrix}_{T_n}$$

R_i : structure profiled as a relation

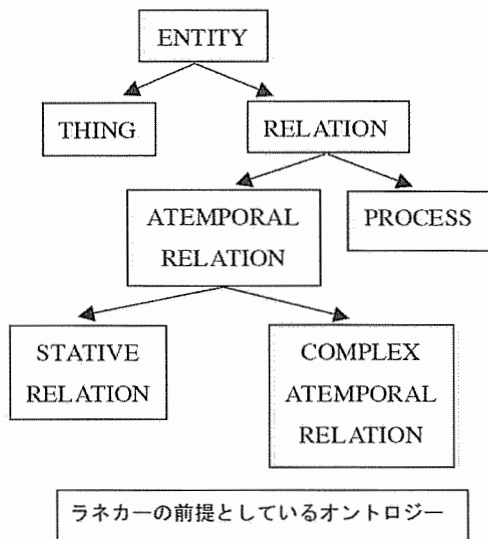
Conceptualizer は $[R_i/t_i]$ という single component しか activate しない。situation が、landmark と target との「関係」(relation)であることから、具体的に書き込む。

(4)



ここでは、 T_n 時において全ての component が activate されている。その都度の瞬間には、それ以前の体験が縦方向に蓄積されている。ここで、縦型の built-up が生じていることに注目しなければならない。

この(4)は relational profile だったが、一般化し entity として記述する。ラネカーでは、次図のようなオントロジーが考えられている。彼は、どのような言語表現も、或る種の存在性を有する対象に関する「概念化」の表現であると考えている。言語表現が与えられれば、それに対応する存在者が存在するか、あるいは特定の事態が成立していると考えている。最広義の「存在者」を entity と呼ぶが、これは〈表象可能な対象〉と同義であり、ある意味では何らかの対象性があればいかなるものにも当てはまる。あるいは、言語表現のどの要素にもそれに対応する対象性が成立していると考えている。ラネカーは、表象可能で、言語表現が可能なものすべてを「存在者」(entity)と名付け、さらに単独で成立している対象を「もの」(thing)と名付け、ものともとの「関係」とは区別する。しかし、アリストテレス以来の〈実体-属性〉関係で捉えられるような「属性」、ないしは「性質」には単独のカテゴリーを割り当てない。全て「関係」として処理する。「関係」(RELATION)とは、時間的關係と非時間的關係との二種類があり、前者は「過程」(PROCESS)と呼ぶ。



以上のオントロジーを前提にして、Entity を用いて、(4)をより一般的に表現するならば、(5)(a)のようになる。出来事 e_i はそれが起こった時点 t_i と密接に結びついているので、 e_i/t_i と表現した。

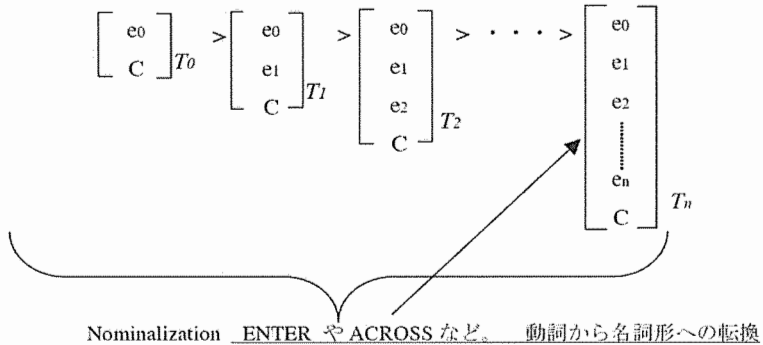
(5)(a)

$$\begin{bmatrix} e_0/t_0 \\ C \end{bmatrix} T_0 > \begin{bmatrix} e_0/t_0 \\ e_1/t_1 \\ C \end{bmatrix} T_1 > \begin{bmatrix} e_0/t_0 \\ e_1/t_1 \\ e_2/t_2 \\ C \end{bmatrix} T_2 > \dots > \begin{bmatrix} e_0/t_0 \\ e_1/t_1 \\ e_2/t_2 \\ \vdots \\ e_n/t_n \\ C \end{bmatrix} T_n$$

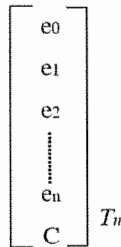
(5)(a)では、それぞれの時点ですでに過去の時点での出来事が縦方向の phase として表現されている。それによると、時点 T_i での概念化には、それまでの出来事が一直線に

縦方向に蓄積されて並ぶのである。(5)(b)では、特に最後は要約的スキャンニング (summary scanning) であり、ENTER の動詞形から名詞形への転換が表現されている。

(5)(b)



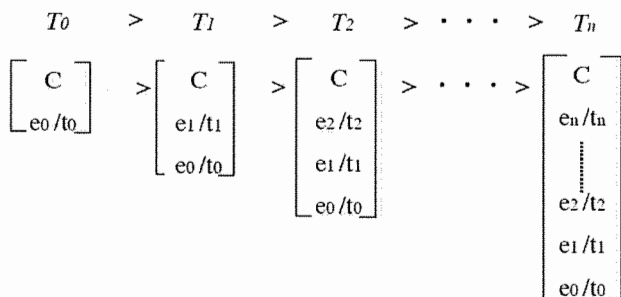
上記の図に於いて、 T_n の結果だけを *stative relation* として提示すれば、下記のような *built up phase* となる。



ここまでがラネカーの分析であるが、これを(6)、(7)のように変換していく。

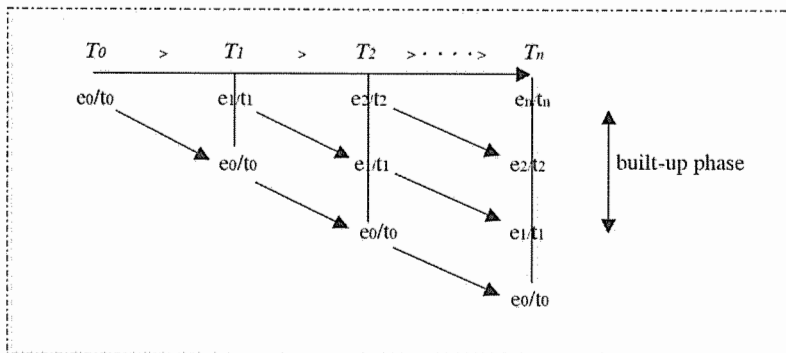
まずは、概念化者 C を上方に移動し、時間系列をその上に描くと、(6)のようになる。その際、出来事 e はそれを特定するのに不可欠なその都度の時点 t_i とともに記述することとする。

(6)



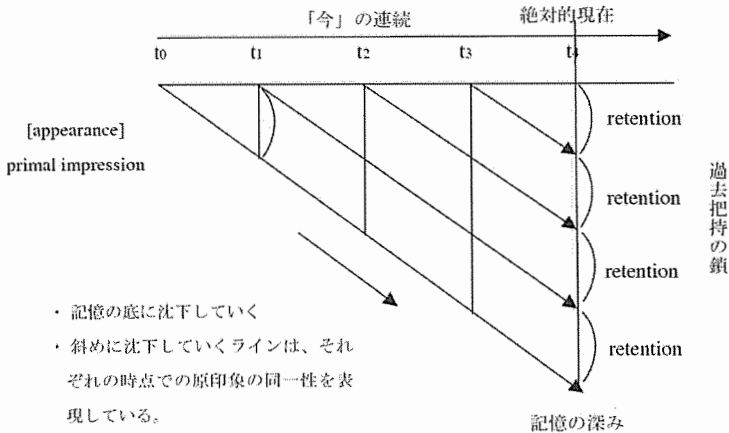
さらにそれぞれの出来事の同一性が明確になるように書き換えると、下記のようなになる。

(7)



これから、フッサールの時間意識の図表(Diagram)を使用して、ラネカーがたどり着いた「プロセス」分析を現象学的に検討してみたい。依拠するのは、フッサールの『内的時間意識の現象学』(*Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*. 1893-1917)である。そこでの時間意識の図表をわかりやすく変更したものが、(8)である。

(8)



フッサールによる内的時間意識の分析とは、temporal object がどのようにして意識に現出するか分析であった。つまり、時間的に変化する対象が志向的意識によってどのように構成されていくかに関する認識論的分析であった。勿論、そのような対象性を度外視して内的時間意識そのものを直接に分析することは不可能であろう。時間的に変化する対象、ラネカーであればプロセスと呼ぶものの「構成」に関する分析なのである。

彼の分析の特徴は、John Locke が使い始めた「過去把持」(retention)なる用語を使用し、その都度の時間意識はそのような〈過去把持の過去把持〉という連鎖からなる記憶の深みを解明することにあつた。その際、その都度感覚に対する刺激から生ずる認識がすぐに短期記憶の枠内で記憶の深みへとずれ落ちていくプロセスを右下がりの沈み込みとして描かれている。これは、その都度の出来事の同一性が保持されつつ、認識が進行していくことの表れである。最初の刺激をフッサールは、Urimpression、つまり「原-印象」と名付けている。その原-印象は、それがなされた特定の時点によってその同一性が保証されていると言ってよい。その原-印象が同一性のスタンプとなるのである。そのような同一性が保持されたまま、垂直下方方向への深みへと沈むのである。

或る特定の時点での時間意識を垂直方向に切り取ると、縦の過去把持(retention)からなる鎖となり、それは重層的「フェイズ」(phase)から成る連続体(continuum)として分析することができる。

かねてより、フッサールのこの内的時間意識の図表に関しては、「縦の志向性」と「横の志向性」が図のどれに当たるか議論が起こっていた。この議論には、ここでは立ち入らないとしても、フッサールの図表や講義の表現では、各「時点」の同一性とその時点で現出した対象の同一性が混同されがちであった。その意味では、ラネカーの e_i/t_i の表記では、両者がしっかりと区別されていて、かつ両者の緊密性も表現されている。

ラネカーのイメージ・スキーマでは、最終的に動詞の名詞化に対応する summary scanning だけが、注目されていたが、フッサールの分析では、 t_4 時で完結した summary cognition が成立しているわけではない。時間的に変化している事象に関しては、その都度の「現在」時点で、絶えず、垂直方向へと伸びる過去把持の鎖が生成していることを示している。そのような垂直方向への連続体が絶えず生成されているからこそ、過去から展開されてきた事象が、あたかも一つのまとまった事象であるかのごとく把握されるといえるのである。

参考文献

(i) ラネカーの著作

Ronald W. Langacker, *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press, 1987.

---, *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II, Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press, 1991.

---, *Concept, Image, and Symbol, The Cognitive Basis of Grammar*, Berlin · New York: Mouton de Gruyter, 1991.

---, *Grammar and Conceptualization*, Berlin · New York: Mouton de Gruyter, 2000.

---, *Cognitive Grammar, A Basic Introduction*, Oxford University Press, 2008

(ii) 哲学、特に現象学に言及した認知言語学文献

William Croft & D. Alan Cruse, *Cognitive Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004 では、「概念化」や知覚の〈ゲシュタルト特性〉が説明される際に Husserl に言及がなされ、

Perspective/Situatedness の説明箇所では、Heidegger に言及がなされている。

(iii) フッサールの著作(関連するもののみ。)

Edmund Husserl: *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins* (1893-1917) English translation: *On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time* (1893-1917), translated by John Barnett Brough, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1991.

—, *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, rev. and ed. Ludwig Landgrebe, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1972. English translation: *Experience and Judgment: Investigations in a Genealogy of Logic*, trans. J. S. Churchill and K. Ameriks, London: Routledge & Kegan Paul, 1973.